



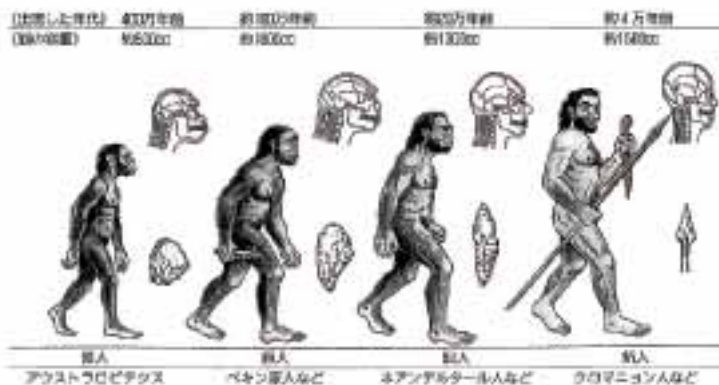
健康会だより

＜主旨と理念＞
長谷部式健康会は『自分の健康は自分の努力で』をスローガンに健康普及活動をしている会です。健康は人生最高の宝です。世界人類の健康と平和に専任しましょう。『体質別』は健康を守る自然の法則です。

発行所 長谷部式健康会 総本部
〒491-0905 愛知県一宮市平和1-2-13
発行人 長谷部茂人
発行部数 3000部
tel 0586-46-1258
fax 0586-46-0367
E-mail kenko@world.interq.or.jp
http://www.interq.or.jp/world/kenko/

浪花節だよ人類は!?

～選択肢はいつでも一か八か～



ついに人類は月へ(1969年アポロ11号)

創造された世界 科学者フリーマン・ダイソン

宇宙物理学で世界的な業績を残したフリーマン・ダイソン(Freeman Dyson 1923～)が、科学の過去と現状への透徹した洞察に基づいて、私たちの10年後～100万年後までの未来像を語った。

10年後、科学技術が大きく変わるようなことはない。ヒトゲノムの精密なデジタル地図の解明とヒト以外さまざまな種のゲノム配列のライブラリ化ぐらいだろう

100年後の世界は、私たちはどんな大義に忠誠心を向けるかによって決まる。この100年後という時間スケールは、人間の予測が可能な上限である。石炭、蒸気、電気、コンピューターチップ、DNA組み換えといった技術はどれもせいぜい100年優位を保ただけで、後を継ぐ技術に地位を奪われる。

100年後には遺伝子工学と人工知能は成熟し、無線テレパシーが登場しているかもしれない。しかし残念な予測としては100年後、私たちの惑星は社会的、生態的問題がすべて解決した平和なユートピアにはなっていないであろうということだ。

1000年の時間的スケールでは、政治も技術も予測できない(・・それだけ長く続いた大きな政治的単位は中国と日本だけである)。しかし言語、文化、宗教の多様性は、なお存在していると予言できる。

ホーム <http://biwahonpo.jp/>

私たちは地球外の小惑星で点々と暮らし始め、そのとき遺伝形成的にも互いに遠ざかる種形成が始まる可能性が高い。自然の種形成は100万年のオーダーの時間スケールが必要だが、遺伝子工学によって押し進められる人間の種形成は、1000年以下の時間スケールで起こりうるのだ。

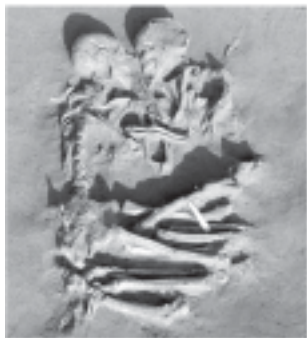


火星に植民地建設が始まるかも・・・。

1万年の時間スケールでは、過去と未来のミスマッチはいつそう深刻になる。質的变化が量的変化を圧倒するだろう。この時間スケールでは、私たちの価値と理念にはどんな変化も可能である。人間の進化の焦点は、生物学から哲学へと移るだろう。私たちが今概念としている科学も存在しているかもしれないし、していないかもしれない。今日の人間の姿と古来の人間の忠誠心が、未来の私たちの領域の一角で保存されることを願うだけだ。

オラフ・ステープルドン (1886-1950小説家・哲学者) の想像によれば、私たちの子孫は『はかなさの崇拜』を心の支えにしているのかもしれない。『はかなさの崇拜』とは、宗教的、芸術的創造の一種で、そこでは短命な生き物の悲劇と美しさに最高の価値がおかれる。

これがコンピュータ化し、知力の発達した種を生と死という古来の現実結びつける拠り所となるかもしれないというわけだ。



約6000年前の若い男女の人骨。イタリアで発掘された。年齢は20歳前後と見られることから火山の噴火など、何らかの危機に怯えながら寄り添い、そのまま亡くなったのではないかと推測される。

知性ある種が残ったとしたら、その種の中心問題は「正気」である。自らつくりだした夢の世界に閉じ込められて悪循環に陥ることを私たちは経験している。夢や幻に耽ける社会は正気を失っている。正気を失った社会に対する唯一の治療法は、つらい現実直面することである。正気とは自然の法則と調和して生きることができるときのみ保たれる。

10万年後のことは、何も予言できない。銀河系中に私たちの子孫が生命を拡げているかもしれないし、別の生命がすでに拡がっているかもしれない。運がよければ異星人たちと仲良く暮らしているかもしれない。もちろん、善悪の観念も異なっているに違いないのだが。

100万年先、もはや人間らしくなくなった後でも、私たちが生き延びているとしたら、私たちはジェームズ・ラブロク (1919- 未来学者) が提唱するガイアと釣り合いを保ち生き続けることになるだろう。ガイア理論とは地球上の化学的過程と生態系は、一つのシステムでつながっておりこのシステムが地球の環境を生命にとって耐えられる限度内に保っているとみる。「地球は一つの生命体である」というのだ。その頃、銀河全体に拡がった生命体は、宇宙の隅々で生命を統御する、宇宙的ガイアに則って活動しているに違いない。

.....

ダイソンは、これら壮大な未来時間を科学的な見識と高邁な精神で語っているのですが、大切なことが抜けている。人類の素性というか、本性というか、向かわざるを得ないその原動力について次章を参照してほしい。

ギャンブル好きは誰に似た！？

安土桃山時代に始まったとされる花札に、猪鹿蝶という役がある。萩に猪、紅葉に鹿、牡丹に蝶。語呂合わせがいい。猪や鹿がバクチしているわけではありません。人間が動物にバクチの要素をくっ付けただけ。競馬も闘鶏もドックレースも、闘っている動物自体は賭け事を知らない。



←花札の役「猪鹿蝶」の組み合わせ。真ん中の鹿ともみじは「シカトする」の語源になっている。

↓競馬に負けると配当金が見つからないことを馬は知らない。



→アジアで広く行われている闘鶏。

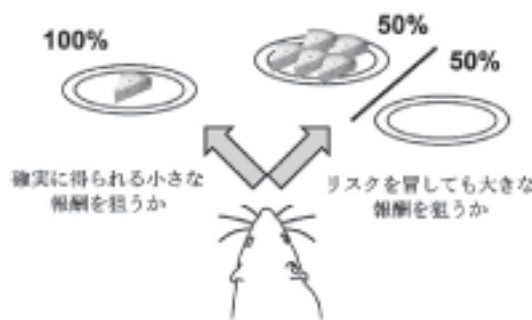


↓日本の闘牛(新潟県)



東北大学生命科学研究科教授の飯島敏夫先生のグループは、今年、ラットを用いた実験でハイリスクハイリターンを好む脳の領域を特定しました。「リスクはあるが当たれば大きな報酬が得られる」という選択肢を選ぶラットは、島皮質と呼ばれる脳領域が活性化している。

実験では常に2滴の水を報酬として得られる「リスクがない」選択肢と、4滴の水が得られる可能性と全く得られない可能性が半々 (50%) の「リスクがある」選択肢を、左右のレバー押しによって選択させました。



生存が危ぶまれるような状況では、リスクを冒しても大量の餌を求めて冒険にでる必要もあるでしょう。しかし、そうでなくてもラットはリスクを冒してハイリターンの選択肢を選ぶのです。

つまるところ、ギャンブル同様ハイリターンがあれば、緊急時でなくとも「それを」選ぶのは、ねずみでさえそうしているということなのです。

パチンコ、マーじゃん、競輪、競艇。しない人からすれば「どうしてそんなことが楽しいのか」と思われるかも知れませんが、する人からしてみれば「そこにハイリターンがあるから」で十分条件なんですね。

必要は発明の母」であっても、その道程は「エイヤ」

発明の機会としての、その必要性はそれとして、発明へ実現する過程はいつでも意外。発明王エジソンは常に失敗に明け暮れていたし、自動車王フォードは一見無関係とも思える断食に近い小食をしたことで乗用車の改良を成し遂げた。インスタラーメンの産みの親である安藤百福も、仁子夫人が天ぷらを揚げているのを見て、麺を油で揚げて乾燥させる「油熱乾燥法」を発明。翌年世界初のインスタ麺チキンラーメンを発売すると同時に日清食品を創業した。発明は常にエイヤの決断で完遂している。

世界大戦直後のこと。「パンやビスケットの配給よりも麺食ならば具も栄養もとれる」と考えているうちは失敗続きで、とうとう無一文になり夫人の調理法を参考にしたら成功できた。世界初のカップめん「カップヌードル」の試作ヒントも、外国人向けに箸を使わないで食べる方法だったという。麺はどんぶり食べるという常識を覆し、コップに入れてしまえ…というエイヤが功を奏した。



歴史は命がけの「エイヤ」

コロンブス船長は船員たちの「引き返しましょう」という提案に屈することはなかった。「インドへは必ずたどり着く。あと1週間我慢しろ！」アメリカ大陸があることも知らないコロンブスに必ず着くという確信があるはずもない。



中心にある白点がイースター島



上の写真はポリネシア人(年代不詳)。左はイースター島のモアイ像(復元)



運良く命が続いているうちに、西インド諸島(発見当初、インドだと思った)にたどり着いた。もしも、発見があつたと数日遅れていたならば…。成功の影に失敗あり、次はもっと失敗に怯まない過去をみてみよう

地球が氷河期であった5万年間前。中国大陸から南下した、後のポリネシア人たちは地続きだったオーストラリア大陸まで生活圏を拡げた。オセアニア諸島でもっとも東に存在するイースター島へは紀元後の移民とされる。

3万年前にはすでに氷河期は去っており、後の島々への移動は海を越えて行くしかない。しかし、その頃はまだ船がない。船を作る技術以前に、木を加工する鉄器がないから船が出来ようがない。数百キロ~千キロ以上?も遠く離れた島へは、筏のような乗り物を組んで移動したに違いない。しかも男女幾人かで。



紀元前18世紀頃に製鉄技術が地中海沿岸部で発明されたという。当初は隕石を材料にしたのではないかとされている。新大陸(アメリカ大陸)に隕石が多数残っているのに、旧大陸(ヨーロッパ)にほとんど残されていないからである。図はエジプトの壁画に表現されたヒッタイト軍の戦車(紀元前12世紀ごろ)。

一方、1万数千年前に、中国大陸からアリューシャン列島(千島列島)へと北上した人たちもいた。その頃は小氷河期で海は凍って地続きになり、島は氷に覆われていたようです。沿岸部に露出する石を積み上げて家を作り、獲物の毛皮を剥いで服にする。食料はアザラシなどの海獣か、幾種類の魚類、海草であったでしょう。その後、数千年の時を経て、アラスカから北・南アメリカ大陸中に人間の居住域は拡大している。

さて、ここで考えていただきたい。海を渡ったアジア由来のポリネシア人も、氷の大地の隙間を縫うように移動した人々も、それまで住んでいた居住地を追いやられるような危機的状況がそこにあったのかを。人口密度が高すぎて食料不足が慢性化したとか、気候変動で狩猟や食糧生産が出来なくなったとか…。むしろその逆で、過酷な条件を厭わず命がけで新天地を求めていませんか。



イヌイットの先祖たちが着ていた服装の絵

聖地エルサレムの奪還に出陣した十字軍の遠征は、1096年から200年間に8回。その間の犠牲者は数百万人にも及ぶ。戦死者でなく犠牲者と書いたのは、十字軍の行動が、およそ蛮行といえるものだったから。女性子供も関係なしに殺戮し、村中火をつけて周って金品を奪取。宝石を飲み込んだ女性の胃から、生きたまま切り開いて取り出したという記録も残っている。

アラブのウサーマ・イブン・ムギンズは当時、十字軍のありさまを「けだものようだ。勇気と戦う熱意には優れているが、それ以外に優れた点はなにもない。動物が体力と攻撃力で優れているのと同様である」と書き記している。

病気に対するバクチ的治療はいつまで続く？

昨年1年間にガンで亡くなった方は35.7万人。毎年4~5千人づつガン死は増えている。ガンと診断されて無治療を選択する人は、まずいないと思う。助かる確率が低くとも、抗がん剤や放射線治療に「一縷の望みを」…となるケースも多いことでしょう

古今東西、医学 医療は、病気が治るか、人が死ぬかを扱ってる。治りそうな治療法が見つかるまでに、すでに半端でない数の人が実験台になって亡くなる。リスク高い治療を承知で「一か八か」を選択するし、そうせざるを得ない状況にも追い込まれる。

近年、PS細胞の発見で新たな治療法が生まれようとしています。しかし、理論上に問題がなくとも、どこに落とし穴があるのかわからないのが世の常です。誰でもが受けられる治療法になるのは遠くないといわれますが、さて、何年先なのでしょう？

ジャンボ宝くじに当たる確率は、1千万分の1といえます。しかし、1千万回買い続けることができるとするならば、確率は1、当たりくじを引けることになります。

フリーマン・ダインが言うように、私たちの未来において、人間が無線テレパシーを使い、地球外の小惑星を植民地化して異星人と暮らすかもしれないという想定は、宝くじを引き続けたときのみ実現するのです。

でも大丈夫！過去の人間の歴史は、医療も含めてすべて「一か八か」の選択をしています。そう続けたことによって今日の私たちがいる。だから、これからもそうなることでしょう。表題の通り、人類の歴史は過去も未来も、浪花節になっているのです。

→第4回十字軍の遠征
↓十字軍の行進進路



なぜ兵士がこのような蛮行に及んだのか？イギリスやフランスから陸路で行進してきたとするならば、数百キロ~千キロ、アルプスを超えなければならぬ。そう！出兵する時点で戦利品を持ち帰る計画だったのだ。それでなければ生きるか死ぬかの旅には出ない。

イベント



【名古屋】1/6映画上映&トークライブ
「思い」の力~遺伝子のスイッチがONになるとき~

映画『スイッチ』村上和雄ドキュメント 13:30~14:55
遺伝子レニンの研究で医科学の扉を開いた村上和雄博士。その村上博士がとんでもない研究を始めた…。愛と笑い その「思い」が遺伝子の働きを変えているというのだ。

講演「降りてくるメッセージをつかむ方法」 15:10~15:50
講師 パニック障がいからチャンスを受かった男 則武 謙太郎
リレートーク「つながる思い」 15:50~16:30

【日時】2013年1月6日(日) 開演13:30(開場13:00)
【会場】ウィルあいち ウィルホール 愛知県名古屋市中区上野杉町1 TEL052-962-2511
【参加費】前売り1,000円(当日1,500円)